
無邪気な恋心

海堂莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無邪気な恋心

【Nコード】

N6743X

【作者名】

海堂莉子

【あらすじ】

私に届いた一通の封書。それが、私の日常を少しだけ（大きくはない……はず）変えた。

第1話

封書が届いた。

つるつるとした霞がかつた銀色の質の良い封筒だ。表面に私の名前だけが刻印されている。切手も住所も消印もない。後ろを見ても、差出人の名前も住所も何もない。不審なものだった。

中身はあまりにも不可解な内容だった。

10月 x日 18:00より王城にて舞踏会を催しますので、必ずご参加ください。大まかに言えばこんな内容だった。

封筒の中身は舞踏会の招待状だったのだ。

まず、日本国内に王はおらず、勿論王城 城ならあるが などあるはずもない。それに私自身高貴な身の上の出自なわけでもなく、ごくごく普通の一般人であり、舞踏会など見たことも出席したこともない。ドレスを着たことさえない。それらの点を踏まえ総合的に見た結果、これが誰かの手の込んだ悪戯であり、恐らく私と同名の誰かと間違えて家のポストに入れてしまったのだと判断した私は、それを机の上に積んであった資料の上にぽんと落した。

そんなことがあったことなど全く頭の中から消え去ったある日のこと。

学校から戻った私は、ある異変に気付いた。

テレビ画面に一枚の紙が張り付けられていた。

テレビがデジタル化した今、私の部屋のブラウン管テレビはその役割を終えた。新しいテレビを買うのも面倒で、さらには処分するのも面倒、押入れに移動するのも面倒、結局放置していたそのテレビ画面に紙が張り付けられていたのだ。

『舞踏会開催のお知らせ』

そう大きく記された用紙は、恐ろしく事務的な内容だった。

そのお知らせを読んで、約1ヶ月ほど前に届いた招待状を思い出

した。馬鹿馬鹿しいお知らせの内容に腹が立って、ぐしゃぐしゃにしてごみ箱に投げ捨てた。

ただ、これは手の込んだ嫌がらせどころの騒ぎではない。何者か私の部屋に足を踏み入れ、わざわざこの忌々しいお知らせをテレビ画面に貼り付けていったのだ。

自分の部屋に見知らぬ誰かが足を踏み入れたと思うと、言い知れぬ恐ろしさと気持ち悪さを感じ背中を冷たいものが走った。

「まさか、ストーカーじゃないよな？」

口に出して、その言葉に恐ろしさを覚えた。

警察に届けるべきだろうか？ イヤ、警察に届けたところで、本気にさえしてくれないだろう。もしも、あなたなんかにもストーカーする人いないでしょ、なんて鼻で笑われたら、警察署で暴れてしまふ危険性がある。そんなくだらないことで、留置所送りにされるのも考えものだ。

誰か男友達に頼んでみようかとも考えたが、その考えもすぐに？き消した。私の男友達にそういった類を相談できる相手 厳密に言えばストーカーを排除できるほどの逞しい男 はいない。

「あいつらに頼んだって足手まといになるだけだし、自分でやつけた方が早いよな」

母には絶対に相談しない。相談したら、大袈裟なことにされてしまいそうだ。

結局私は何もしなかった。防犯カメラを部屋に取り付けてみようかとも思ったが、そうすれば母にバレる恐れがあるし、防犯カメラを買うだけのお金も悲しいことになかった。

ただ、帰った時は部屋を隅々までチェックしたし、家の周りに不審人物がいなかどうか気をはって過ごした。

その後、部屋が荒らされたり何かを盗まれたり変なものが置かれたり貼られたりすることもなく、不審人物が周りをうろついている事実もなかった。

私は、その日の出来事を決して忘れないだろう。イヤ、忘れられないだろう。

不審人物の形跡が全くないことに少しばかり気を緩めていた日曜日の午後、学校の課題に手をつけていた私は妙なものに顔を上げた。

タプン、という音だろうか。水に手や足を入れた時のような、それとも池の鯉が尾びれで水を立てた時のようなそんな音だ。

私の部屋の中に水槽はない。飲み物を飲んでいただけでもない。水と呼べるものはこの部屋の中にはなかった。

不思議に思い顔を横に向けた瞬間、私は凍りついた。イヤ、小さな悲鳴くらい叫んでいたかもしれない。

そうなのもおかしくはない光景を私は目にしていた。

ブラウン管テレビの画面から人が這い出て来ようとしていたのだから。ホラー映画のあの人物を思い出した私は、逃げることも出来ずにただその光景を見守っていた。

ただ一つ救いだったのは、這い出て来ようとしている人物が長髪でないことだろうか。なんでかあの長髪は恐怖心を倍増させていたと私は思うのだ。

ずり、ずりと這い出て来た人 若しくは霊と呼ばれるものは、大きくふうつと息を吐くと立ち上がり、パタパタとスーツをはらって身だしなみを整えた。

「お初にお目にかかります、川村亜美様。私、^{わたし}お迎えにあがりまして」

すらりと伸ばした背中をしなやかに折り曲げ、懇懇丁寧にそう言った。

「あんだ誰だよ。おつ、お化けか？」

人には秘密にしているが、私は不可思議現象に滅法弱い。お化けや霊、妖怪、未確認生物。全てお断りだ。

「いえ、私はお化けではございません。名はワットと申します。こちらに参るのにこのルートしかございませんで、少々窮屈ではござ

いましたが、失礼ながら通させて頂きました。不格好を晒し、申し訳ございません。亜美様も知つてのとおり、今宵は舞踏会でございます。私、亜美様をお迎えにあがりました」

丁寧過ぎるもの言いと胡散臭い笑顔に鼻じらんだ。

「てめえかつ。あの訳の分からん招待状とお知らせを貼っ付けて行きやがったのはっ」

お化けじゃないと分かった私に怯えはなく、怒りだけが腸を煮えくりがえっていた。

男のネクタイを締めあげ、耳元で怒鳴り散らした。

「亜美様は凶暴でいらっしやるようです。ですが、殿下はそういう方をお嫌いではないようですので、ぴったりではないでしょうか」

「何ごちゃごちゃ言つてんだ、てめえ。はったおすぞ」

「はったおされるのは本望ではございませんので、少々手荒ではございませんが、失礼させて頂きます」

につこりと微笑み、そう言うや否や、私の腹部に強烈な痛みが走った。マズいと思つた時には既に私の意識は殆ど飛んでいた。

「申し訳ございません、亜美様」

てめえ、ぜつてえ許さねえ。その言葉は口を吐いて出ることはなかった。

第1話（後書き）

新連載です。

平日更新でやっていきます。

読んで下さると嬉しいです。

第2話

ボソボソと数人の声が飛び交っているのを近くで聞いたような気がして目を覚ました。

目の前には見慣れないドレスを着せられた私が、数人の女性にメイクを施されている姿がそれはもう大きな鏡に映し出されていた。さほど長くもない黒髪が器用に後ろでまとめ上げられている。

自分で言うのもなんだが、悪くない。

「つて、違っわっ。あんたら誰よ？ 人攫いかっ」

がばりと立ち上がり、彼女達の手を振り払って怒鳴った。

私が4人 後ろに1人、前に3人いた を威嚇して睨み付けると、困惑したように顔を見合わせている。

「あの馬鹿丁寧でいけすかない男を出せっ」

手を伸ばそうとした1人の女性から、触れられないように捕われないように後退り、力の限り叫んだ。

「本当に凶暴な方ですね。あまり彼女達を苛めないで下さい」

「出たな、誘拐犯。その顔を見れないものにしてやるわっ」

それはお断わり致します、と苦笑する。

男 確かワットとか言ったか は、彼女達に目で指示を与え、退出させた。

「私を今すぐ家に帰せっ」

「亜美様を部屋にお帰しするとお約束いたします。けれどその前に舞踏会に出て頂きたいのです」

「バカを言え。今すぐ帰せっ」

「お帰りになりたいのならばお好きにどうぞ。ただ、亜美様に帰り方がお分かりになるのですか？」

わざとらしく残念そうに首を傾げる。

「っ。てめえがさっさと帰せば済むだろがっ」

私は再び奴のネクタイを締め上げて怒鳴った。

胸ポケットからハンカチを取り出し、落ち着き払って飛び散ったであろう唾を拭き取っている。

「全くもっていけ好かない男だ。」

「まあ、落ち着いて下さい。私の願い事など取るに足りないものです。ほんの二時間ほど舞踏会に参加してくださいればいいのです。会場にいてさえ下されば。そのあとは私が責任を持って亜美様をお部屋にお帰し致します。お母上が戻られる前に必ず送り届けるとお約束いたします。どうかお願い致します」

「知ってるか？ あんたがやってるのは強迫だ。……ちゃんと八八が帰る前に家に戻してくれるんだろっな？」

ええ勿論、と微笑むワットを心の底から殴りたいと思った。

「分かった。出てやるうじゃねえか、その舞踏会とやらに。言っとくけど、行儀良くなんて期待するなよ。ダンスも出来ないからな」

「亜美様が男前なのは、十分承知しております。料理は沢山ご用意させていただいておりますので、存分にお楽しみください」

にこりと微笑むワットのネクタイを漸く解放した。

「ところでどこどこ？」

「ここは……」

「ちよつと待てっ。それ以上言っな。これは夢だ。そう、これは何かから何まで夢」

私は自分自身に言い聞かせた。これが現実だったとして、どうして信じる事が出来るだろうか。全て夢だと思っていたほうが気が楽だ。理解できないことを考えても仕方ないのだから。

「夢、ですか。そう思っ頂いても結構です。亜美様、そろそろ支度に戻って頂きたいのですが」

うん、と素直に従うと先程の4人組が再び現われた。

「さつきはごめん。あんた達に不快な思いさせたね」

「いえ、戸惑われるのは当然ですもの」

4人の中で一番年長　といつても20代だろう　の女性にこやかにそう言った。他の方達もニコニコと笑っている。

「では、時間をロスした分スピードを上げて参りますよ」

頼もしいその女性は、年少の3人に頼られているのが分かる。

私は暫くの間、彼女達のされるがままにされていた。

一度舞踏会に出るとなると、腹も据わり覚悟も出来る。だが、それでいて夢だと思っっているので、気楽なものだった。

私は参加することに意義を見いだされているようなので、多少の無礼も許されるだろう。

私は全く緊張していなかった。寧ろどんな料理があるのかと、楽しみな程であった。

扉が開かれると、そこはきらびやかで眩しく、私は目を細めた。

女性のドレスのなんと色鮮やかなことか。私の水色のドレスは初め見たときは度胆を抜かれたが、この中に至っては地味な方であるようだ。

何故か会場の視線がこちらに向けられているような気がした。

「みな亜美様を御覧になっっているのです」

私の手を取りエスコートするワットが小声で囁いた。

「なんでだよ？ 私に喧嘩売るためか」

「何を仰っているのですか、亜美様の美しさに注目されておいでです」

「あはは。面白いな、その冗談」

笑い飛ばせば、残念なものでも見るような目を向けられた。

ムカつくぞ、ワット。

「まあ、いいですけどね。亜美様にその自覚がないのは火を見るよりも確かです」

自己満足したように、何度か頷いている。勝手に満足しないでもらいたいものだが。

「さあ、こんなところで立ち往生していても何も始まりません。参りましょう、姫様」

「お前、次姫様とか言ったらぶっ殺すからな」

「はいはい、承知しました」

「はい、は一回だって習わなかったのか？」

表情は始終にこやかに、だが、交わされる会話は何とも物騒なものだったと記憶している。

中央にはダンスフロアがあり、幾人かのペアがダンスを楽しんでいる。立食フロアには、料理を皿に乗せて意中の女性に振る舞おうとする男性がせっせと作業をしている。

ざわざわとあちこちで談笑がされており、そのお行儀の良い雰囲気一気に疲れを感じるのだった。

「おい。こいつらいつもうふふ、おほほって笑ってんのか？ なんか気持ち悪いな。本当に面白くて笑ってるようには見えないけどな」「それが社交界というものです。時として愛想笑いというのもあります」

「まあね。でも、ここにはそれしかないじゃないか。本当に楽しそうにしてる奴なんていないんだな」
「残念ながらそうかもしれませんね。野望と策略、腹の探り合いです」

ワットもまたそういう社交界を良く思っていないのか、眉間に皺が寄っている。

「ワット。お前が連れて来たのはその者か？」

声の方に振り向くと、私と同じくらいの背丈の
約165？ほど
少年がにこやかにワットと私を見ていた。

「はい、そうでございます。殿下」

殿下と呼ばれたその少年を、私は無遠慮に観察した。

第3話

無邪気な瞳に無邪気な笑顔。醸し出す雰囲気全体が無邪気な少年だった。

誰だって成長するにつれどうしたって経験する嫌な現実を目の当たりにし、否応なしに擦れていく。この少年には、そんな擦れた感がないのだ。

この舞踏会でさえ渦巻く悪しき感情を見てもなお、この純朴さを保てるものなのか。悪しきものを遠ざけられて育ったのか、それともそれすらも彼の無邪気さには適わないというのだろうか。

いずれにしろ、私は少年のその純朴さに憧れ、羨み、そして妬んだ。

「亜美様、こちらは本日の主役であらされますレイ殿下でございます」

「主役？」

「はい。本日の舞踏会は、レイ殿下の16歳の誕生日をお祝いするものであり、婚約者をお探しする目的でもございます」

少年の誕生日だったのか。

「そりゃ、おめでと。あんたにとっていい年になるといいな」

相手が王だろうが王族であろうが、態度を変える必要はないと思っていた。ワットだって私の礼儀をどうの言うつもりはないようだ。

王子レイは、私の無礼に驚いたのだろうか、私を凝視したまま固まっている。

「おい、レイ。大丈夫か？　なあ、ワット。レイ動かないぞ。大丈夫なのか？」

話しかけても微動だにしないレイをどう対処していいかわからず、ワットに助けを求めた。

苦笑を浮かべるだけの薄情者のワットが助けを差し伸べるつもり

がないと悟ると、私はレイの顔を覗き込んだ。

「ホントに大丈夫か？」

間近でレイの瞳を覗き込んだ。青とも緑とも言えない美しい瞳が突如大きく見開き、遠ざかっていった。

少し距離を詰めすぎたのだろうか。驚いて、後方に飛んだレイは、海老を彷彿とさせた。

「ただ大丈夫つ。本当に大丈夫だから」

何にそんなに慌てているのか分からない。

変な奴だ。

「大丈夫ならいいけど、具合悪いなら無理するなよ？　なあ、ワツト。お腹すいたから食べてきてもいいか？」

「ええ。私は少し挨拶回りをして参りますので、ごゆっくり」
頷いて、別れた。

食事の置かれているスペースには、あまり人はいない。みなお喋りやダンスに忙しいようだ。間違っても食事をがつついたりする者はいない。

皿を手に取り、何を食べようか思索していると、隣に気配を感じ顔を上げた。

「なんだレイ。あんたもお腹が空いたのか？」

「空いてはいない」

空腹でもないのに、なぜか私の隣りに居座ろうとしているようだ。「なんだ。じゃあ、どうした？　もしかして私が一人なのを心配して来てくれたのか？　それなら私は大丈夫だぞ。あんたは婚約者を探さなきゃならないんだろ？　ほら、女性達があんたを見てる。皆話したがってるんじゃないのか」

「イヤ、俺は」

「なんだ？　何か言いたいなら、ちゃんと言わないと伝わらないぞ」
「俺は……、あなたといたいっ」

顔を真っ赤に染め上げて、上目遣いで私を悩殺しようとしている。勿論、無自覚でだ。

無邪気さは時に武器になるのか。

「そうか。なら、いけばいいんじゃないか？」

そう答えると、パツと花開くように笑顔になった。

あつ、耳が生えた。ああつ、尻尾も。

勿論それは幻覚でしかなく、実際に生えているわけではない。だが私には、レイの頭とお尻にそれらが生えているように見えたのだ。まるで犬のように。

どうやら懐かれたようだ。尻尾をふりふりと大ぶりに振り、私に微笑みかけるレイは何とも可愛らしい生き物だ。

「これが凄く美味しいんだ。俺のお気に入りだよ。亜美殿にもぜひ食べて貰いたいんだ」

私の皿を横取りし、甲斐甲斐しく料理を取ってくれる。

料理自体は日本での食事と変わらない。料理の名前こそ違つようだが、その中身は同じものだ。レイがお気に入りだと言つたのは、スパゲティで、恐らくボンゴレだろう。

ニコニコと皿を手渡され賞味すると、やはりそれは日本で言うところのボンゴレだった。

「美味しいな。日本と変わらないから、私には馴染みやすいんだな」
「本当？　じゃあ、もっと食べて。これと、これとこれが俺のお勧め。それと、これは料理人がお勧めだつて言つてたんだ」

これでもかと乗せられていく料理を渡された傍から片付けていく。突飛した料理はなく、全て味わつたことのあるものだった。

日本の高級ホテルで料理を食しているのと変わらない。滅多に味わうことのできない高級感漂う料理を心行くまで味わつつもりでいた。

「んん、のど渴いた」

そう口にすれば、レイが飛んで行って飲み物を手にして戻つて来た。

シャンパングラスに入ったそれは、とてもジュースとは思えなかった。未成年　19歳だ　の私がアルコールを摂取することは

ない、といわなければならぬところだが、実のところいける口だ。八八の晩酌に付き合わされているからなのだ。

ありがとう、と受け取ってまず一口。

甘みのあるそれは、カクテルのように飲みやすい。だが、恐らくアルコール度は強そうだ。大量摂取すると危険なことになりそうだ。自分の摂取限量は理解しているつもりでいる。この強さなら、二杯くらいで止めておいた方がいいかもしれない。

「レイ。あなたはもっとご令嬢たちと話しをした方がいいんじゃないか。さつきから心なしに鋭い視線を感じる。私が視線で串刺しになる前に挨拶の一つもして来い。私は少し夜風に当たって来る」

ポスト婚約者を狙うご令嬢たちの鋭い視線は始終感じていた。そんなものを一々気にしているわけではないが、一言も話せずに終わるのは彼女たちがあまりに可哀想だ。

それに、先ほどのお酒が思ったよりもアルコール度が高かったのか、少し酔いざましがしたかった。

「分かった。でも、すぐ戻って来るから。バルコニーで変な男に話しかけられても相手にしちゃダメだからね」

「はいはい、分かったよお」

手を振り、何度も振り返り私を確認するレイを見送った。

レイがご令嬢たちと話し始めたのを見届けると、バルコニーへと足を向けた。

バルコニーには人気はなかった。それをいいことに大きく伸びをする。

「おっ、目の前は海なのか？」

暗くて気付かなかったが、ザザンザザンと波の音が聞こえる。バルコニーから下を覗き込む。降りられない高さではない。

「ちよつとくらい抜け出してもいいよな？」

誰にもなく問い掛けた。

「いいよ」

そして、それに自分で答え、ドレスを捲くしあげ足を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6743x/>

無邪気な恋心

2011年10月21日09時59分発行